

平成21年 3月 6日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：17530364  
 研究課題名（和文） リスク社会と道徳規範—社会と個人を「切る」社会学の可能性についての研究  
 研究課題名（英文） Risk society and moral: New sociological perspective which cuts the relation between the individual and the society.  
 研究代表者 三上 剛史（MIKAMI TAKESHI）  
 神戸大学・国際文化科学研究科・教授  
 研究者番号：80157453

研究成果の概要：リスク社会と規範についての概括的導入を行い、続いて、リスク社会と道徳・連帯の問題を詳細に検討し、これを特にリスク社会における信頼の問題として理論的に検討した。本研究を貫く論点である個人と社会を「切る」ということの可能性について、ルーマンの業績を参照しながら、「切る」ということ的具体的あり方について検討したものである。

本研究によって得られたリスクと公共性、連帯と監視についての社会学的見通しは、今後、「リスクと監視と個人化の行方—個人と社会を「切りつつ結ぶ」社会学の可能性—についての研究」として引き継がれ、更に論点が深められる予定である。

最終報告書として『リスク社会と道徳規範—社会と個人を「切る」社会学の可能性についての研究—』（平成21年3月付、全73頁、印刷製本済）を作成した。

## 交付額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2005年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2006年度 | 800,000   | 240,000 | 1,040,000 |
| 2007年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 2008年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 3,000,000 | 900,000 | 3,900,000 |

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：3801

キーワード：リスク社会、道徳、公共性、連帯、個人と社会、N・ルーマン

## 1. 研究開始当初の背景

現代社会学は「ポスト近代」的諸理論の徹底的近代批判と、「リスク社会」という新たな状況に直面して、理論的にも実践的にも多くの課題と困難を抱えている。社会学がそれらの諸問題に応え、そのアクチュアリティを保持するためには、社会学という学問をその成立に遡って根本的に考え直し、個人と社会を「切る」理論として根本的に書き替えられる必要があった。

## 2. 研究の目的

これまでの社会学は、行為論、システム論、相互作用論などの用語によってその歴史が語られてきたが、このような語り方は現代的課題を解決する際の足枷にもなっている。今日の社会において基本的に問い直されているのは個人と社会の関わりを問い直す問題群であり、個人のライフスタイルや価値観の多様性と両立させつつ、いかにして社会が可能になっているのかを理論化することが求められた。

これは本来、古典的社会学以来の基本的テーマであったはずであるが、社会学の理論的發展の中で忘れ去られてきた問いでもある。社会学という学問がもともと個人と社会を「結びつける」ことに大きな努力を払ってきた学問であることを思い出すならば、正にそのような努力の延長線上に、現にある社会学とは異なった社会学の姿が描かれねばならなかった。

## 3. 研究の方法

研究は三つの方向で進められた。第一は、古典的理論と現代的理論の対比、殊にデュル

ケーム＝パーソンズの規範主義的道德理論と、ハバーマス＝ルーマンのポスト近代的道德理論の再吟味であった。

第二は、個人と社会の結びつきが希薄化しつつある実情を扱った文献・資料をできるだけ多く参照することであった。それらの理論的成果を吸収しながら日本の現状を踏まえつつ、リスク社会の道德規範が、個人と社会を「切る」ことに収斂してゆくことを確認した。

## 4. 研究成果

本研究課題の成果としては、平成 17 年度から平成 20 年度にかけて、幾つかの著書・論文を発表したが、学術雑誌に掲載された 4 つの論考を軸としつつ、最終報告書として『リスク社会と道德規範—社会と個人を「切る」社会学の可能性についての研究—』（平成 21 年 3 月付、全 73 頁、印刷製本済）を作成した。全体は 3 章と補論という構成である。

目次は、以下の通りである。「はじめに」、第一章「リスクと不安：グローバル化、公共性、連帯」、第二章「社会的なもの」の純化か終焉か？」、第三章「信頼論の構造と変容：ジンメル、ギデンズ、ルーマン」、補論「*Liebe als Passion* (N.Luhmann) 解釈のためのノート—親密性のメディア—」。

第一章では、リスク社会と規範についての概括的導入を行い、その後、第二章ではリスク社会と道德・連帯の問題を詳細に検討し、第三章では、これを特にリスク社会における信頼の問題として理論的に検討した。補論は、本報告を貫く論点である個人と社会を「切る」ということの可能性について、ルーマンの業績を参照しながら、「切る」ということの具体的あり方について検討したもの

である。

本研究によって得られたリスクと公共性、連帯と監視についての社会的見通しは、次期の研究課題『リスクと監視と個人化の行方—個人と社会を「切りつつ結ぶ」社会学の可能性—についての研究』に引き継がれ、更に論点が深められる予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

①三上剛史平成 2008 年 12 月 「信頼論の構造と変容：ジンメル、ギデンズ、ルーマン—リスク、信頼、監視—」、『国際文化学研究』(神戸大学大学院国際文化学研究科紀要) 第 31 号、pp. 1-23 査読無

②三上剛史平成 2008 年 11 月「「安心・安全」、「信頼」概念再考のために—社会的パースペクティブ—」、安全安心社会研究ワーキングペーパー、(財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構、pp. 1-13、査読有

URL:

<http://www.hemri21.jp/kenkyusyo/katsudo/pdf/wp2008001j.pdf>

③三上剛史平成 2007 年 12 月 「「切り」つつ「結ぶ」メディアとしての〈愛〉—*Liebe als Passion*

(N. Luhmann) 解釈のためのノート—」、『国際文化学研究』(神戸大学大学院国際文化学研究科紀要) 第 29 号、pp. 93-116 査読無

④三上剛史平成 2007 年 11 月 「リスクと不安：グローバル化、公共性、連帯」『ひょうご 21 世紀』(ひょうご震災記念 21 世紀研究機構) vol. 3、pp. 1-11 査読有

⑤三上剛史平成 2007 年 3 月 「「社会的なもの」の純化か終焉か?—〈連帯の喪失〉と〈道徳の迂回〉 : システム分化と統治性—」、『社会学評論』第 57 巻・第 4 号、pp. 687-706 査読有

[学会発表] (計 4 件)

①三上剛史 平成 20 年 10 月 11 日 公開シンポジウム『人類学的リスク研究の探求』「リスク社会の隘路」(京都大学)

②三上剛史 平成 20 年 8 月 12 日 「安全・安心の仕組みづくり方策」、ひょうご 21 世紀研究機構研究会

③三上剛史平成 19 年 10 月 9 日 「ポスト福祉国家のリスクと監視」、ひょうご 21 世紀研究機構研究会

④三上剛史平成 17 年 6 月 26 日 日本社会学史学会シンポジウム『リスク社会と知の社会学』(熊本学園大学)

(※コメンテーターとして参加)

平成 19 年 11 月 2 日 日仏社会学会シンポジウム『グローバル化時代における安全/安心社会構築—日仏比較の視点から』(関西学院大学、高野山大学)

〔図書〕（計 4 件）

①三上剛史平成19年3月 「リスク社会と知の様式—不知と監視」 田中・荻野編『社会調査と権力—〈社会的なもの〉の危機と社会学』、世界思想社、pp.21-43 242頁

②三上剛史平成18年12月 「フーコーの社会理論」 新睦人編『新しい社会学のあゆみ』、有斐閣 pp.125-143 353頁

③三上剛史平成18年4月 「ハーバーマスと公共性論の現在—「公」と「私」の社会学—」 飯田哲也・早川洋行編『現代社会学のすすめ』、学文社、pp.202-222 308頁

④三上剛史平成17年7月 「身体論への知識社会学的断章—身体という場所—」 大野・油井・竹中編『身体社会学』、世界思想社、pp.33-57 276頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

三上 剛史 (MIKAMI TAKESHI)  
神戸大学・国際文化学研究科・教授  
研究者番号 80157453

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし